

論文

Australian Englishの語彙

—— 頻出語と口語・俗語の慣用表現 ——

大 滝 真

The Lexicon of Australian English

—— Its Frequently-Used Words and Idiomatic Colloquialisms ——

OHTAKI Makoto

目 次

はじめに

I Prologue (序章)

I - 1., 2., 3., 4., 5.

II Australianismsの主たる特徴

— 典型的な語彙を通しての考察

III AusEの一般的基本語彙及び頻出語

III - 1., 2.

IV 重要項目別解説

V 結び

Notes

References

はじめに

世界にはさまざまな種類の英語があり、それぞれ独自の特徴を持った英語の変種 (varieties) として地球上の各地域で使われている。イギリス英語 (British English)、アメリカ英語 (American English)、カナダ英語 (Canadian English)、アイルランド英語 (Irish English)、オーストラリア英語 (Australian English)、ニュージーランド英語 (New Zealand English)、南アジア英語 (South Asian English)、東南アジアの国々における英語 (Southeast Asian English)、南アフリカ英語 (South African English) などである。

World Englishes (WE)¹⁾の一つとしてきわ立った特徴を持つとされるオーストラリア英語 (Australian English; 以下 AusE と略す) の多様な言語的特色のうち、特に語彙面 (lexicon) に焦点をしばって、現代における AusE 特有の語句、とりわけ日常の頻出語と慣用的な口語 (colloquialisms) あるいは俗語表現 (slang expressions) を重点的に取りあげ、他方 AusE の基礎となっている19世紀の語彙にも言及しながら AusE の語彙の特徴を浮き彫りにしたいと思う。

I Prologue (序章)

I - 1. さまざまな英語の一変種としての AusE は、1788年に First Fleet (第一次船団) が英国から初めて南半球に位置するオーストラリアの Botany Bay (New South Wales) に到着した時から始まる。これは1770年に Captain Cook がオーストラリアに上陸し、New South Wales をイギリス領として占有を宣言し、この地が British Penal Colony と指定された時から18年後のことである。この時、750名の convict たちが初めて移送されたとされている。²⁾

AusE は起源的にはイギリス英語 (British English; 以下 BrE と略す) か

ら派生し、主としてロンドンを中心とするイングランド南東部の諸都市の出身者、イングランド中部の工業都市とそれらに隣接する地域からの出身者、それにアイルランド系の人たちが多くを占めた最も初期の流刑囚や入植者たちが用いた多様な英語の要素を基盤としている。つまり、AusEは発生的に見て、19世紀末のBrEをベースとし、主として都会の英語から発達したものとと言える。³⁾

初期のconvictや入植者たちはほとんどが不熟練の貧しい労働者階級に属する都市居住者であり、そのため田園や地方の風土・地形に関する語彙、あるいは地方の産業に関連した農耕・牧畜等についての語彙も乏しかったと推定されている。⁴⁾

このような多種多様な英語（都会語、主としてロンドンのCockney、俗語、Irishや他の地域方言等）の混合体の中から、本国とは全く異なる自然環境と社会状況の中で200有余年の歳月を経て発達し、雑多な、異なる言語的要素間の吸収・排除・融合あるいは適応などの言語作用を通してLeveling（水平化）が行われた結果、BrEやAmerican English（以下AmEと略す）と多くの共通点を所有しながらも、他の異種にも見られないAusE独得の言語的特性を併せ持つ英語に発展して今日に及んでいるのである。

以上のような発達過程において、BrEやAmEから受けた言語的影響は無視出来ないが、すべての言語的側面に対してではなく主として音韻的（phonological）側面や語彙的（lexical）側面においてそれらの影響の痕跡をある程度見出すことが出来る。しかし、その他の側面、例えば文法的（grammatical）あるいは統語的（syntactical）な面においては少なくとも書き言葉において、英米の標準的英語と比べてほとんど差異は認められていないと言っても差しつかえないであろう。

I - 2. 本稿でこれから記述しようとする対象は、AusEに認められるユニークな音声的特徴ではなく、今日のオーストラリアにおいて多用され

る AusE 特有の語句であり、歴史に残る伝統的な語彙と表現を含め、日常のくだけた口語的表現と俗語的表現である。そして、この口語的言語面においてこそ AusE の特徴が最も明確に示されることになるのである。

一般的に言って、形式張った表現、特に書き言葉 (written English) においては BrE と比べ文法・語法・形態の面で基本的にはそれ程大きな差異はないと言える。語法の権威 Fowler が著した *A Dictionary of Modern English Usage* 中の語法・文法上の規範に照らしてみても、written English に関する限り BrE からの大きな逸脱は認められないという意味では、特筆すべき事項はほとんどない。つまり、標準英語 (British Standard English) に準じていると言ってよい。

しかし、会話のような日常の話し言葉 (spoken English)、特に親密な間柄同士の発話において用いられる語句は、AusE 特有の語句 (Australianisms) と慣用的な口語表現 (colloquialisms) が頻出し、とりわけ他国からオーストラリアへやって来た英語の話し手が、その未知あるいは不慣れな語句に接して当惑するような状況がしばしば起こる。

これは AusE に見られる特徴的な発音、特に母音 (vowels)、二重母音 (diphthongs)、抑揚 (intonation)、それに若干の子音 (consonants) を含め、BrE や AmE との発音上の違い、調音に関しての差異がわかりにくさの原因になっているばかりでなく、口語体で使われる AusE 独得の語や慣用語がその原因となっている場合が多々あるのである。

I-3. それでは手始めに、日常的な語句を用いた AusE の informal style のサンプルを以下に示すことにしたい。出典はオーストラリア国立博物館発行の書物 *Aussie English for Beginners*. (National Museum of Australia : Canberra ACT., 2002) から採ったものである。

Through events such as the Sydney Olympics, the whole world can now confidently say 'G'day mate' while they *chuck* a *snag* on

the *barbie*, *crack* a *tinnie* or open a bottle of *plonk*.

文中の語（イタリック体）について解説を加えることにする。この口語体の英文の中で使われている語彙の中に、平均的日本人の英語学習者から見て、いくつかの意味不明な語が入っていると思われる。例えば *G'day*, *mate*, *chuck*, *snag*, *barbie*, *crack*, *tinnie*, *plonk* などの単語である。オーストラリア人ならほとんど苦もなく意味の把握が出来る程度の一般的な語である。

まず *G'day* であるが、これは ‘Good day’ の短縮形でオーストラリアでは昼夜の別なくいつでも使われる挨拶語。オーストラリア人は [gəðɹi] のように発音する。1928年初出。言うまでもなく ‘May you have a good day’ を短縮したものである。

次の *mate* (*mately* とも言う) は相手に話しかける時の a mode of address (呼称) で、オーストラリア人が多用し、「親密・平等・善意」を表すために使われる古典的な Australianisms の一つと言ってよい。本来、‘a close friend’ の意味を持ち、友人同士や仕事仲間の間の「親密な関係・きずな」を *mateship* (男の友情) と言う。なまりの強い Broad Australian と一般的な発音とされる General Australian では [mɹɪt] という発音表記になる。以下に2つの用例を挙げる。なお、文尾の [] 内に出典を示す。用例は Ex. (= ‘Example’) で表すことにする。

(Ex. 1) A man greeted me after the fashion of the Bush, with a
‘Good day mate!’ [(1862) AND]

(Ex. 2) He had little to say—just a quiet ‘G’day’. [(1928) AWO]

なお、慣用句として ‘to go mates’ (= ‘to work as an equal partner’ [AWO] とか ‘to be mates with’ (= ‘to be good friends with’ [MD]) という表現がある。

次の *chuck* は「ひょいと投げ込む」という意味を表す *verb* であるが、AusE には同義語が豊かにあり、‘throw’ に代わる *verb* として *dice*, *hoik*, *hoy*, *hoist*, *ding* などが使われる。⁵⁾

snag は「隠れ木；切り株」の意味ではなく、口語で *sausage* の意味で使われ、通例、*snags* のように複数形で用いられる。次の *barbie* であるが、これは *barbecue* (丸焼き用の焼き網) という単語の *diminutive*。語尾の *-ie* は *-y* や *-o* の接尾辞と同様、AusE の特徴的な語形変化で、例えば *prezzie* (<a present)、*hostie* (<an air hostess、つまり a female flight attendant)、*alkie* (<an alcoholic)、*postie* (<a postman) などと同じように Australian *diminutive* の一種で多用される。

crack は「栓 (せん) を抜く」を意味する *verb*。*tinnie* は *tinny* とも綴り、‘a can of beer ; the contents of such a can’ [AND]、つまり「缶ビール」を意味する俗語である。

最後の *plonk* の定義は ‘wine or fortified wine, of poor quality’ [AWO] で、意味は「ワイン」。「安酒」を意味することもある。フランス語 ‘*vin blanc*’ (= ‘white wine’) の *blanc* に由来している。

以上 8 語について語義を解説した。英文全体の意味は従って次のようになる。

「シドニーオリンピックのような一大イベントをやったお蔭で、今では全世界の人たちがバーベキューにひょいとソーセージを投げ入れ、缶ビールの栓を抜き、ワインのボトルを開けながら、「やあ、元気かい」(‘G’day, mate’) と自信をもって言えるのです。」

I-4. 次にもう一つ、AusE の典型的語彙を用いた別のサンプルを挙げてみることにする。19世紀末に書かれた詩でオーストラリアでは誰でも知っている一節である。

Once a jolly *swagman* camped by a *billabong*,
 Under the shade of a *coolibah* tree;
 And he sang as he watched and waited till his *billy* boiled,
 ‘You’ll come *a-waltzing matilda* with me.

オーストラリア英語 (AusE) の典型的語句を含む英詩の一部を引用したが、これは A.B. Paterson が 1895 年に作詩したもの。1917 年に出版された。今日ではオーストラリアの国民歌 (準国歌) と称されるほど一般化した歌詞 (‘Waltzing Matilda’) で、スコットランドの古い ballad の曲に乗せて歌われている。

この詩の中で使われている AusE 特有のいくつかの語彙は、第一世代のオーストラリア人たちが用いていたもので、今日の多くの Aussie たちには各語の由来についてはほとんど知識がないと思われる。解説を加えるならば、まず *swagman* から。この語は「徒歩旅行者・渡り労働者・浮浪者」を意味し、「*swag* を持って旅行する人」が原意。*swag* という単語は British dialect から AusE に入り、古くは「戦利品・強奪品」を意味する thieves’ slang に属していた。*swag* とは「身の回り品を入れて持ち歩く細長い包み」のことで、肩にかついで奥地 (outback) を回り歩いた。このような旅人たちは *swagger* (又は *swaggie*) とも呼ばれた。

次の *billabong* という語であるが、これは「川の分流；袋水路；干上がった河床」を意味する。先住民語 (Aboriginal languages) からの借用語で *billa* (= ‘river’) + (*bang* (= ‘dead’)) から作られた語であると推定されている。

coolibath という語は植物名でやはり先住民語に由来。*Coolabah* という綴り字もある。「オーストラリア北部産ユーカリ属」で *gum tree* (= ‘eucalyptus,’ 単に *gum* とも言う) の一種。川岸に生育し、堅くて丈夫な木材を産み出す木。

billy とは「(ワイヤーつきの) 野営用湯沸かし (= *billycan*)」。主として

ブリキ製のもので *swagman* たちは *outback* (奥地) で野営する際に *billy* を用いてミルクや湯を沸かしたり、調理用としても用いた。フランス語の ‘*bouilli*’ に由来すると見る学者もいる。

最後の *a-waltzing matilda* であるが、*Waltzing Matilda* という句を1893年に初めて用いたのはオーストラリアの詩人で短編小説家として名高い Henry Lawson (1867-1922) で、*Waltz* と *Matilda* の2語ともドイツ語から借用されたとされている。*Waltz* は ‘*walzen*’ (= ‘to rove, travel’) から、*Matilda* (= ‘*swag*: a bushman’s bundle’) は固有名詞 *Matilda* の特殊用法。*a-waltzing matilda* という句の意味は、従って、‘*carrying a swag*’ (「(旅には) スワッグを携えて」) となる。

この詩の中には、これらの語彙の他に *jumbuck*, *tuckerbag*, *squatter*, *trooper* 等の Australianisms が使われており、最初の *jumbuck* の意味は「羊」で Australian pidgin から入り、‘*jump up*’ が崩れた (なまった) 語形とされている。次の *tuckerbag* は「食物入れ」(*tucker*= ‘*food*’), *squatter* は「牧場公有地借地人; 牧羊業者; (大規模な) 牧場経営者」などの意味で使われ、最後の *trooper* は「騎馬警官」。

19世紀オーストラリアの自然・風土・風習・生活全般が、これらのオーストラリア独得の趣き、味わいを帯びた語彙を通して我々に伝えられるのである。

I-5. 以上、AusEで書かれた口語体の文章の見本を二種提示し、それぞれの文章の中に出て来る特徴的な語句についての解説を行ってきたが、これらの説明を通してある程度明らかになった事実をいくつか列挙してみたい。

第一は、AusEの語彙の中にはかなり古い英国地域方言 (British regional dialects) に由来する語が少なからずあること。第二に、俗語 (English slang) に起源を持つ語がかなり混入していること、そしてその中には *cant* – いわゆる ‘*flash language*’ も含まれている – にルーツを辿

ることが出来る語彙も混じっていること。第三として、丁度 AmE の発達初期において先住民の言語、主としてアルゴンキアン系の言語からかなり多数の語が借用された場合と同様に、オーストラリア先住民の言語 (Aboriginal languages)、主として白人たちが最初に接触することの多かった Port Jackson 地域の原語からの借用語が今も息づいていること。そして第四として、先住民の原語以外の言語、例えば AmE や他の言語からの借用あるいは影響等も、程度の差こそあれ、無視出来ない事実であること。第五として考慮すべき点は、一般標準英語に属する既存の語彙を用いて形成された複合語または派生語、あるいは意味変化・機能変化を与えて適応させた語 (句) が改造または新造されて来た、という事柄である。個々の事例については次章以下で詳細に解説・吟味したいと思う。

II Australianisms の主たる特徴

— 典型的な語彙を通しての考察

II - 1. Australianisms の特色を一層明確にするために、AusE の中で使われている典型的な語・句を取り出し、項目別に順次説明を加え、かつ、それらに関連した多様な表現や口語・俗語の慣用句を紹介していくことにする。

① Aussie (Ossie, Ozzie) :

頻繁に用いられる *Aussie* という語は、まず *noun* として①Australia、②an Australian、③Australian English の三つの語義を持ち、*adjective* (以下 *adj.* : と略す) としては④Australian (オーストラリアの、オーストラリア人の) を意味する。

例えば ‘He is a dinkum *Aussie*.’ と言えば「彼は正真正銘のオーストラリア人だ。」の意味となる。以下に用例を示す。

(Ex. 1) They were so glad to be back in dear old *Aussie*.
[(1965) AND]

(Ex. 2) Oh, crayfish is *Aussie* for lobster. I think. [(1972) AWO]

(Ex. 3) The Oz habit of shaking hands while looking away at an angle of ninety degrees. [(1972) AND]

(Ex. 4) We'd a bunch of *Aussie* shearers, and they come from New South Wales. [(1910) AWO]

Aussieland (= 'Australia'), *Aussielander* (= 'an Australian') という語も使われる。

Aussie という語の語尾に使われている *-ie* (*-y* の異形) は、*-a*、*-o* などの接尾辞と同様 AusE 特有の指小辞で、多くの単語の語尾に使われている。このような diminutive を多用する傾向は非常に顕著であり、例えば *pressie* あるいは *prezzie* (<a present)、*alkie* (<an alcoholic)、*mossie* (<a mosquito)、*acca* あるいは *acker* (<an academic)、*journio* (<a journalist)、*kero* (<kerosene)、*ambo* (<an ambulance) といった具合である。

② Down Under :

down under という句は南半球に位置する 'Australia (and New Zealand)' を指す。noun, adverb (以下 adv. と略す) としての用法のほかにはハイフン付きの限定用法がある。例えば

(Ex. 5) Because I came from 'Down Under', they gave me imposing statistics on petroleum, helium, sulphur, mercury, beef cattle. [(1951) DAC]

(Ex. 6) I knew him '*down under*' five years ago, a tall, rugged, smiling faced Australian. [(1918) AND]

この句はオーストラリア人自身は余り使わない。

③ Abo, abo ; Koori :

*Abo*はAustralian slangでAboriginalの短縮形。「オーストラリア先住民」を指しているが、一人の場合は‘an Australian aborigine’とか‘a native Australian’などと表現する。大文字、小文字の両形(*Abo*, *abo*)が用いられるが、時として侮蔑的(derogatory)な含意を持つことがある。

(Ex. 7) Fires were lighted, and the ‘*abos*’ feasted royally on fish broiled on live coals. [(1922) *OEDS*]

(Ex. 8) In Australia ‘native’ means a born-and-bred Australian white man, while the black native Australian is referred to as an ‘Aboriginal’, or ‘Abo’ for short. [(1926) *AND*]

英国系オーストラリア人は‘Anglo-Australians’、口語で‘Anglos’と言う。最初にオーストラリアに来た白人たちは原住民たちを命名する努力を怠った。Captain Cookは‘Natives’と呼び、Tenchは‘natives’とか‘Indians’などと呼んでいたようで、比較的最近までaboriginalあるいはaborigineと小文字を用いて使われていた。The Australian Government’s *Style Manual*では単数を*Aboriginal*、複数を*Aboriginals*, *adj.*は*Aboriginal*を用いるよう勤めている。一方、*Aborigines*という形も特に問題はないようで、先住民自身は*Aboriginal people*という表現を好んでいると言われている。

New South WalesとVictoriaではKoori (*adj.*; *noun*)という語が採用されており、一方、東部海岸や南西部では*Nyungar* (= ‘man, person’)が使われる傾向がある。シドニー大学ではAboriginal Education Centreが‘The Koori Centre’と改称されている。NZでは白人はMaori語でPakehaと呼んでいる。

④ 'roo ; wallaby ; dingo ; bandicoot :

'roo は kangaroo の短縮形。アポストロフィをつけずに単に *roo* と書くこともある。この語に関係ある慣用句を挙げるならば、'to have kangaroos in the top paddock' (= 'to be crazy or eccentric' - [AND]) とか 'kangaroo court' (「私的裁判、(リンチ式の) 人民裁判」、'kangaroo-bar' (「動物との衝突から車を守るための重い金属製バンパー」) などがある。Kangaroo の語源は黒又は灰色の大型カンガルーを意味する原住民語 'gangurru' であるというのが定説のようだ [MD]。

(Ex. 9) There was nothin' here down under 'cept mobs of abos, 'roos, and dingoes [(1955) AND]

(Ex. 10) If you show signs of mental weakness you are either balmy, dotty, ratty, or cracked, or you may even have ... kangaroos in your top paddock. [(1908) AND]

(Ex. 10) の用例に出ている 'balmy' (= 'barmy') 以下の4語はいずれも 'eccentric ; crazy' を意味する同義語。

次の *wallaby* であるが、これも原住民語で「小型のカンガルー」。中型は *wallaroo* と言う。以前にはさまざまなスペリングで表記されていた。例えば、*wallaba*, *wallabee*, *wallabi*, *wollaba*, *wollabi*, 等々。原住民語は1788年に Southwell によって収集され、1790年には Hunter、翌年1791年には Blackburn によって、そして1798年には Collins によって採集されたが、Port Jackson words から他の地域に及び、採集者により原音の転写にむらがあり、幾通りものスペリングが生ずることになる。

例えば *waddy* は *wad-di*, *waddty*, *woo-da*, それに *woo-dah* といった綴り字があり、また *bookbook* は採集者によって、*pou-book* (Hunter)、*bok-bok* (Blackburn) ; *ceurrajong* は *cara-d'yung* (Southwell), *carra-'duin* (Hunter), *car-rah-jun* (Collins) のような違いが見られる。

wallaby の入った慣用句として、従来非常によく使われて来た表現に *on the wallaby* (= 'on the move') があるが、「(奥地を) 歩き回って、放浪して (= 'on the tramp') ; 仕事にあぶれて (= 'unemployed')」のような意味を表す。また *wallaby track* という句は 'the path worn by a wallaby' [AWO] の意味である。

(Ex. 11) The man *on the wallaby* almost invariably makes his night-camp under a tree. [(1927) AND]

(Ex. 12) We decided to put swags on our backs and go '*on the wallaby track*'. [(1779) AND]

(Ex. 12) の用例のように *track* を入れて使うこともある。この他、*wallaby* の語義には①an itinerant rural worker ; swagman [AND] (放浪者、(地方の) 渡り労働者) ; ②Australians (the *Wallabies* という複数形で) ; ③オーストラリア国際ラグビーユニオンチーム (同じく the *Wallabies* という複数形で) 等がある。

(Ex.13) ... but there he was, a real swagman walking down the road ... 'He's a '*wallaby*', said Wally. [(1956) AND]

(Ex. 14) The New South Wales and Queensland members of the Australian Rugby Union team, the *Wallabies*, returned to Sydney yesterday morning. [(1939) AND]

次は *dingo* について。これは「オーストラリア産の野生の犬」のことで、最初 (1788年) は 'native dog' と呼ばれていた。Aboriginal word であるが、この語の持つ含意は余り芳しくない。人間に適用した場合はひどい軽蔑語になり、「ベテン師、裏切り者、卑怯者」といった意味を表す。例えば

(Ex. 15) 'You're not goin' to fight!... I always thought you were a flamin' *dingo*!' [(1923) *DAC*]

のような文では 'cowardice' の象徴として人に使われている。また 'treachery' を暗示する語でもあり、*dingo* (on～) の動詞用法は 'to behave in a cowardly manner' [*CHE*]; 'to betray, let down' [*DAC*] (卑怯なことをする、裏切る) の意味を持っている俗語用法である。

(Ex. 16) Don't *dingo* on your mates! [*CHE*]

dingo-hunter (又は *dogger*) という語句もある。

最後の *bandicoot* という語であるが、勿論これも原住民語からの借用で「バンディクート科の有袋類の総称」である。この動物の習性から 'to *bandicoot*' という動詞用法は「(茎をそのままにしてジャガイモなどを) 掘り起こす」及び「捜し出す (= 'fossick')」の意味で使われる。simile に使われることも多く、'as bald as a *bandicoot*' (すっかりはげ上がって)、'as barmy as a *bandicoot*' (頭が変になった)、'(as) poor as a *bandicoot*' (ひどく貧しい)、'(as) miserable as a *bandicoot*' (非常にみじめで悲惨な) 等、いろいろな句の中に登場する。

⑤ bush ; brush ; scrub ; mulga :

まず *bush* であるが、意味は「低木 ; やぶ」ではなく「奥地 ; 未開拓地、(未開の) 森林地帯」というオーストラリア独特の語義である。標準英語で使われている 'forest, woods' に代る語として、19世紀初頭から用いられて来た。

(Ex.17) They live perpetually in the wilderness, or as it is called in the Colony, 'The *Bush*'. [(1842) *AND*]

次の *brush* (= ‘the small growing trees or shrubs of a wood ; a thicket of small trees or underwood’ [OED]) は定義にある通り「低木の茂み」の意味を持つ。 *Bush* よりも早い時期に Aus E に入っている。茂みに生育する動植物名をつけて例えば *brush apple*, *brush cherry*, *brush turkey* 等の複合形が生まれている。後に意味が拡大して *forest* 「うっ蒼たる森林」を意味するようになった。

scrub という語も ‘anywhere remote from civilization, or...any place to which one might abscond, or avoid contact with one’s fellows’. [DAC] 「低木林, 低木地帯」という意味に使われるが、人里離れた土地という連想を伴う。‘head for the *scrub*,’ out in the *scrub*’ という表現も使われている。

(Ex.18) The *scrub*... is a peculiar kind of forest or jungle... [(1887)
AND] /A *scrub* is usually a dense thicket of the trees...
[(1882) AND]

scrub は *shrub* よりも広い意味合いで使われ、the *Mallee* という語も the *scrub* の同義語。the *Mallee Scrub* (又は the *Mallee*) of Northern Victoria はユーカリ属の植物 (*Eucalyptus dumosa*) が繁茂する叢林地帯を意味する。この他、原住民語から入った *mulga* という語は「アカシア (*Acacia*) 属の低木」の意味であるが、the *mulga* という形で「奥地」 (=bush, outback) を表す。⁶⁾ 慣用句として *mulga mail*, *mulga wire* はいずれも「噂、口コミ」を意味する。また *in the mulga* という句は ‘lost or in trouble’ の意味で使われる。

(Ex.19) Local gossip flourished through a word-of-mouth medium referred to as ‘the bushman’s *mulga wire*’. [(1983) AWO]

最後に、*bush* にちなんだ慣用句及び *bush* から作られた複合語を紹介したい。

to go bush 「(都会を離れて) 奥地へ行く；姿をくramsす；野生化する」、*to bush it* 「奥地で野営する；奥地で生活する」、*to take (to) the bush* 「奥地に逃げる；匪賊になる；野生化する」、*to go up the bush* 「内陸部へ行く (= ‘to go inland’)」、*to go down to the city* は前の表現の逆で「都会へ行く」。

bushie (または *bushy*) は「奥地居住者；田舎者」の意味、*bush carpenter*, *bushfire blonde* はそれぞれ「未熟な大工」、「赤毛の女」。*bushranger* という語は19世紀始めに活字になって現われ、AmE では「森林地帯に住む人 (= ‘bushman’)」の意味で用いられるが、AusE では元来「奥地に逃げた脱獄囚」を表していたが、後に「匪賊、山賊」という意味変化を起こし、本来の意味が低下した。

(Ex.20) Domestic flowers are beginning to ‘go bush’. [(1953)
AND]

(Ex.21) Joe won £2,000 in a sweepstake,... put it in the bank...
and went bush. [(1940) AND]

(Ex.22) Four young desperadoes...were wanted by the police
before they ‘took to the bush’. [(1918) AND]

以上の語句のほか *bush* をベースとした表現、特に複合語は多数あり、*bushed* (= ‘lost in the bush’), *bush apes*, *bush baptist*, *bush bread*, *bush craft*, *bushfire*, *bush lawyer* (= ‘one who parades an only fancied knowledge of the law ; one who ‘lays down the law’ [AND]), *bushmanship*, *bushman’s clock* (= ‘the kookaburra’), *bushwhacker* (= ‘one who lives in the country (as opposed to the town)’ [AWO], *bush telegraph* (「秘密情報伝達網」) などを挙げることが出来る。*bushman’s*

Bible というのは *The Sydney Bulletin* のことで、かつて広い読者層を抱えていた人気のあった文芸週刊紙（1880年創刊）である。

最後に、多用されて来たイディオムを一つ指摘したい。*Sydney or the bush* という句は ‘all or nothing’ [DAC]（「いちかばちか」）の意味で、大金をもうけて首都で暮らすか、幸運に見放され、奥地で暮らすか、の二者択一を暗示している。用例を以下に示す。

(Ex.23) ‘*Sydney or the bush!*’ cries the Australian when he gambles against odds, and... [(1930) DAC]

(Ex.24) ‘Here we go,’ Turk murmured grimly, climbing in behind the wheel. ‘It’s *Sydney or the bush!* Keep your fingers crossed.’ [(1970) DAC]

bush で生まれた AusE 独得の慣用句があり、‘bush idioms’ と呼ばれているが、これについては章を改めて言及するつもりである。⁷⁾

㊦ She’ll be right ; a fair cow ; bluey :

AusE の口語表現の中に ‘She’ を ‘it’ の意味に使う語法がある。「万事、すべて」の意味を表す。従って、‘She’ll be right.’ は「万事オーケーだろう」、‘She’s apples.’ は「万事順調だ」の意味となる。‘apples’ は ‘apples and spice’ (= ‘nice’) という rhyming slang に由来し、例えば、‘Everything’s apples.’ という英文は Everything is in good order. という意味である。⁸⁾

(Ex.25) ‘How’s it going, Wally? *Everything apples?*’ [(1952) DAC]

(Ex.26) ‘*She’s apples,*’ the worker replied, with another demonstrative wink. [(1961) DAC]

次の *cow* という語は、*johnhop* (= ‘policeman’) と同様 AusE 及び NZE では ‘an unpleasant person, thing, or situation’ [NOED] (「いやなやつ、物、事、立場、状況’) という意味を表すことがある。‘a fair cow’ と言うと一層強い意味になる。

(Ex.27) It’s not so bad coming down the river But it’s a fair cow going up.’ [(1933) DAC]

(Ex.28) He’s a cranky, unreasonable, old cow. [(1968) AND]

fair dinkum という表現がよく使われるが、*dinkum* は英国方言から入り、‘reliable ; genuine ; honest ; true’ [AND] (「本物の、正真正銘の’) の意味を持ち、‘If you’re *dinkum*, I’ll help you.’ とか ‘It’s *fair dinkum* what I’m telling you.’ のように使われる。後の文では ‘fair’ をつけて強調している表現となり、また副詞用法として (= ‘honestly’ の意味で)、‘Fair (又は *straight ; square*) *dinkum*, don’t deceive me.’ のような言い方がある。

ついでに補足するならば、‘information ; news’ という意味を持つ ‘oil’ という語と組み合わせて、*dinkum oil* (= ‘reliable information ; an accurate report’ [AND]) という句が生まれ、例えば ‘I’d like the *dinkum-oil* from someone in the know about it.’ のように用いられる。

三つ目の単語 *bluey* は AusE ではいろいろな意味に使われる。

① = ‘swag’ (既出。「放浪者の身回り品包み」、② (青色の交通違反) 「呼び出し状’ (= ‘summons’)、③ 「赤毛の人’ (= ‘redhead’)、④ 「青い毛布」、⑤ 「オーストラリア産の牛追い犬」等の意味を持つ多義語である。

①の ‘swag’ の意味での *bluey* は ‘to hump one’s bluey’ という慣用句の中で使われ、意味は ‘to carry one’s swag’ (「旅に出る ; 放浪する’) である。

(Ex.29) An expression used for what in England we call ‘tramping’ is ‘*humping the swag*’ or ‘*the bluey*’. [(1911) DAC]

(Ex.30) When I first set eyes on him, he was *humping his drum*, hoofing it down the road from Tilpa. [(1961) DAC]

上の後の用例で使われている *drum* も ‘swag’ や ‘Matilda’ (既出語) の同義語である。

㊦ Noah ; Ned Kelly ; Pat Malone ; Oscar ; onka :

ロンドンの Cockneys は rhyming slang (押韻俗語) の使い手として世界的に知れ渡っているが、AusE でも時折散見される。それらの中から代表的なものを拾い出してみたい。その前に、例えば ‘mince-pies’ (=eyes), ‘trouble and strife’ (=wife), ‘Duke of York’ (=walk ; talk ; cork ; chalk ; fork ; ‘Duke(s)’ と省略されることがある)、‘elephant’s trunk’ (=drunk ; これは最も古いものの一つで通例 ‘elephants’ と略して使う) 等の例を挙げてみたが、これらは BrE Cockney の中で昔から、大体 19 世紀中頃あたりから頻繁に使われて来た例である。

次に AusE で創出された rhyming slang の例を示すことにする。

① *Noah* < Noah’s Ark (=shark 又は nark)

② *Ned Kelly* (=belly) (注) Ned Kelly (1857-1880) はかって bushranger として名を轟かせていた人物。

③ *Pat Malone* (=own) ; ‘on one’s Pat Malone’ という句の中で用いられ、‘on one’s own ; alone’ の意味で使う。

④ *oscar* < Oscar Asche (=cash) (注) Oscar Asche (1871-1936) は actor として活躍した人物。

⑤ *onka* < Onkaparinga (=finger) (注) Onkaparinga は地名。南オーストラリアの町の名前。原住民語。

以下、①～④について1例ずつ用例を挙げる。

(Ex.31) ‘I’ll tell you what’s worse than the *Noahs*,’ said Edgar.

‘What about those bloody dragonflies?’ [(1982) *AWO*]

(Ex.32) I got his arm and rammed a right into his *Ned Kelly*.

[(1951) *AWO*]

(Ex.33) The photograph for which you have sat *on your Pat Malone*. [(1910) *AND*]

(Ex.34) ‘If you’d been fighting all those blokes in the ring you’d have more *oscar* in your kick now than the Prime Minister himself’ [(1959) *DAC*]

Ned Kelly にはもう一つ慣用的に使われている句があるので、ついでに simile を示すことにする。

(Ex.35) In fact, to pay him his due compliment, he was *as game as Ned Kelly*. [(1958) *DAC*]

上文の ‘as game as Ned Kelly’ という句は「極めて勇敢な、闘争心のある」という意味を表している。Rhyming slang の例をもう少し補足すると、*Sydney Harbour* (=barber), *post-and-rail* (=‘fairy-tale’: lie, falsehood), *Captain Cook* (=look), *knock-me* [-silly] (=billy), *Uncle Ned* (=bread), *steak and kidney* (=Sydney), *soft as silk* (=milk), *butcher’s hook* (=look; ‘crook’: angry), *squatter’s daughter* (=water), *rub-a-dub* [-dub] (=pub; *rubby*, *rubberdy*, *rubbity* と短縮) 等。その他 *uncle Willy* (=silly), *pie and peas* (=threes), *meat pies* (=eyes), *magic wand* (=blond), *eau de cologne* (=phone), *ducks and gees* (=police), *tos and froms* (=Poms)。Bakerによると、この種の slang は WW I, WW II の時期

に普及し、単調で余り痛烈でもなく想像性に乏しい類の俗語であるため、オーストラリア人たちは余り使いたがらないと述べている。⁹⁾ ‘Cockney Slang’ と呼ばれるように、Cockneys たちが愛用し、オーストラリアの Sydney に持ち込まれた結果、オーストラリアの新しい風土で普及し、いくつかのユニークな AusE 独特の俗語（きざっぽく気まぐれな語感を与える）が誕生したと見る事が出来る。

㊦ ropeable ; banker ; muster ; mobs (of) :

「ロープで御せない程の荒くれ牛」のことを AusE で *ropeable* と言う。つまり、‘wild ; intractable’ の意味であるが、後に転意して口語では ‘angry ; bad-tempered’ の意味を持つようになった。

(Ex.36) ‘I often remember how you broke that washstand at Yuruga. Mother was *ropeable*.’ [(1956) DAC]

次の語 *banker* について。この語の用法も AusE 独特のもので、‘(Austral informal) a river flooded to the top of its banks’ [NOED] (「土手いっぱいまで水かさが増して流れている川」) の意味で使われる。‘to run [又は come down] a banker’ という形で、例えば

(Ex.37) The thirsty ground was unable to absorb it all... Every creek and depression *ran a banker*. [(1935) AWO]

動詞 *muster* の本来の語義は、‘to assemble (convicts) for counting, inspecting, etc. ; to take a census of (the population, or a sector thereof).’ [AND] (「(囚人たちを) 集合させる、呼集する ; 人員点呼する」) であったが、ここから「(牛・羊を) 寄せ集める (round up)」の意味に転化し、人間から家畜に適応範囲が拡大した。

(Ex.38) Cattle are marked....They all run loose in the Bush, being
'mustered' or collected every now and then. [(1926) AND]

広い範囲にちらばった家畜を一個所に集める役目の犬のことを 'a mustering dog' と言う。寄せ集める人は 'a musterer' である。最後の単語 *mobs* (*of*) の用法であるが、*mob* という語をオーストラリアでは「暴徒；群集；暴力団」のように人間に適應するばかりでなく、「動物の群」 (= 'a flock or herd of animals') に対してもこの語を用いる。

(Ex.39) A *mob* of lambs ... a rare *mob* of chickens ... a great *mob*
of quail. [(1848) AND]

(Ex.40) '*Mobs of cattle* scattered over the surface, like flies
resting on a billiard table.' [(1838) AND]

㊦ humpy ; gunyah ; mia mia :

オーストラリアでは発音と同じように、語彙についても地域による差異は非常に少ないと言われる。つまり均一性が認められているが、Aboriginal languages からの借用の仕方を見ると、多様な言語が存在していたために同一事物を指す語彙は地域によって異なる場合が生じる。

例えば「先住民の小屋」を意味する単語は

① *humpy* (Victoria州の現地語)、② *gunyah* (New South Wales州の内陸部)、③ *mia mia* (Victoria州)、④ *gundy* (Port Jackson語)、⑤ *wurley* (South Australia州)

のように、地域の違いによって生ずる語彙の差異に対する関心が最近強まりつつあり、その方面の研究の成果が公表され始めている。

㊧ yakka ; bingy ; boko ; bogey ; budgerree ; budgerigar ; yarraman ;
gibber ; corroboree ; gin ; cooe ; cobbera ; coolamon :

これまでに言及した原住民語からの借用語を除き、ピジンから AusE に入った語も含めて一般的口語になっている Aboriginal words をいくつか紹介することにする。

① *yakka* (仕事、骨折り仕事)、② *bingy* (胃、腹)、③ *boko* (*boco*とも綴る；片目の馬又は人)、④ *bogey* (一泳ぎ；水浴びする)、⑤ *budgeriee* (素敵な、すばらしい、よい；きれいな)、⑥ *budgerigar* (オーストラリア原産のインコ)、⑦ *yarraman* (馬)、⑧ *gibber* (丸い巨石、巨岩)、⑨ *corroboree* (原住民の歌・踊りが入った集会；お祭り(騒ぎ))、⑩ *gin* (原住民の女又は妻)、⑪ *cooee* (原住民が合図に使う甲高い叫び声；‘within cooee of’の慣用句で)、⑫ *cobbera* (*cobra*とも綴る；頭、頭蓋骨)、⑬ *coolamon* (木製・樹皮製の皿・たらい)

以上、代表的な語を選んだが、Aboriginalsからは樹木、植物、動物、鳥や魚、自然の風物、武器、あるいは原住民の生活に関わる住居、祭、集会、人間、等についての言葉が AusE の中に取り入れられ、そのうちの少数の語が現在も使われている。

以下に、上記の13語のうちの数語について用例を示すことにしたい。

(Ex.41) ‘I’m not scared of a fit of hard *yakka*.’ [(1962) DAC]

(Ex.42) ‘I’m going to ride the *boco*.’ [(1906) DAC]

(Ex.43) While the team went on the white men remained behind to have a *bogey*. [(1933) DAC]

(Ex.44) Good, bonzer or *budgeriee* — as the blackfellows say. [(1959) AND]

(Ex.45) Holland was our only hope *within cooee of* winning an Olympic gold medal at Montreal. [(1984) AWO ; ‘*within cooee*’ (=‘within reach ; near’)]

1790年に Hunter によって収集された現地語約250語強のうち、大体10%

ほどが現在も残存して使われていると言われる。かつてRamsonは編著書の中で、現在広く知られているのはせいぜい40語ぐらいであろうと推定していたが、最近はその推測値を修正し、実際は予想以上に多い数が残存していることを認め始めている。

□ the Alice ; the dry ; Adders ; Croweaters ; Kiwis ; Ocker ; Eccla ;
Sydneysider :

AusEに見られる独特の語法の一つに、名の知られた地名に‘the’を付けて表現する傾向がある。例えば

the Alice (=‘Alice Springs’) や *the Gong* (=‘Wollongong’) の他に山名・港・街路・川の名称なども *the Mount* (=‘Mount Gambier / Mount Morgan’), *the Port* (=‘Port Adelaide’), *the Cross* (=‘Kings Cross / Southern Cross’), *the Creek* (=‘Julia Creek’), *the Bay* (=‘Byron Bay’)

のように表現する。この他 *the dry* (=‘the dry season’:「乾期」), *the wet* (=‘the rainy season’:「雨期」), *the bitumen* (「アスファルト道路」) などの例を挙げる事が出来る。また

Adders, *Honkers*, *Sydders*, *Packo*, *Seppo* のような簡略した表現もあり、順に ‘Adelaide’, ‘Hong Kong’, ‘Sydney’, ‘Packington Street’, ‘Separation Street’ を表している。

また *Croweaters* は ‘South Australians’ を指すニックネーム、*Kiwis* は ‘New Zealanders’ を指している。

人名の呼び方について言うと、‘Oscar’ という名前の人は誰でも *Ocker* 又は *Occa* というニックネームで呼ばれ、‘Eric’ は *Eccla*、同様に McDonald 又は McKenzie は今でも *Macca* と呼ばれている。 *Ocker* は1930、1940、1950、年代に盛んに用いられたが、TVシリーズ物に登場していたコメディアンの Ron Frazer という人物が強いなまりのオーストラリア英語の使い手として人気を博していたようで、この人物が *Ocker* というニックネーム

で呼ばれていて、この語を普及させたとされている。この語に対する女性の相当語は*Shirl*。Simpsonは*Simmo*となる。

最後の*Sydneysider*は「Sydneyの住民、Sydney生まれの人」を意味する。

⑫ to barrack for ; to knock out ; to make one's tucker ; won't have a bar of ; to dob in ; to win a motza ; don't have a brass razoo ; to come the raw prawn on ; to tickle the peter ; to have white ants ; to poke mullock ; to put in the nips (hooks / fangs) ; to go bung ; to put the acid on ; to be jack of ; to go crook ; to do one's block ; to go troppo ; to run a stumer ; to put the hard word on :

最後に、AusEのcolloquialismのうち、特に動詞を用いた慣用的表現の中から代表的な口語・俗語を選んで列挙し、各イディオムの意味について説明を加えることにする。

①to barrack for～ (～を声援する)、②to knock out (かせぐ)、③to make one's tucker (食べる分だけやっとなぐ)、④don't have a brass razoo (= 'penniless' : 一銭も持っていない ; (注) razoo = 'a (non-existent) coin of trivial value' [AND])、⑤to dob in (1. 密告する、2. 金を出資する、3. 嫌な仕事をあてがう)、⑥to win a motza (大金をもうける ; (注) motza (= 'motser') : 「大金」。この語はYiddishから入った)、⑦won't have a bar of (～は大嫌いだ、～には我慢がならない ; 'can't stand a bar of' とも言う)、⑧to come the raw prawn on ((人に) つけ込もうとする、(人を) だまそうとする)、⑨to tickle the peter (横領する、使い込む、資金を盗む ; (注) peter = 'a box or safe' [AWO])、⑩to have white ants (= 'to be eccentric or 'dotty' [AND] : 「変っている、狂っている」)、⑪to poke mullock at (あざ笑う、からかう ; (注) mullock = 'rubbish' [NODE])、⑫to put in the nips (金の無心をする、金を借りる)、⑬to go bung (故障する ; 破産する ; 失敗する ; (注) bung = 'dead' : 原住民語)、⑭to put the acid on ((人に借金

などを) せがむ、強引に働きかける)、⑮*to be jack of* (～にうんざりしている)、⑯*to go crook* (=‘lose one’s temper ; become ill’ [NODE] ; (注) *crook*=‘bad, unpleasant, unsatisfactory’ ; なお *be crook on*=‘be annoyed by’ [NODE] という句もある)、⑰*to do one’s block* (怒る、興奮する ; (注) ‘do’ の代りに *lose* を使うこともある)、⑱*to go troppo* (熱さで頭が変になる、狂う ; *troppo*=‘mentally disturbed ; crazy, mad’ [DAC])、⑲*to run a stumer* (八百長レースをやる ; (注) *stumer* は「負け馬、にせもの」)、⑳*to put the hard word on* ((人に) 頼みごとをする、(女性に) 言い寄る、(人に) 金を貸してくれと言う)。

以上、AusE で使われる典型的な慣用句を紹介したが、そのほとんどは ‘slang’ に属する口語体で、オーストラリアばかりでなく、ニュージーランドでもなじみのある表現である。どれをとっても、くだけた informal AusE 独特の趣きを感じさせるイディオムと言ってよい。

AusE の研究者 J.S. Gunn は Baker が著した書物、*The Australian English* について次のように評している。

He (i.e. Sidney J. Baker) has paid great attention to the rich body of Australian informal usage...it is here that much of the distinctiveness of our idiom is found.¹⁰⁾

また語法・俗語の権威、Eric Partridge は俗語について以下のように述べている。

“Nearby all slang ... consists of old words changed in form or, for more often, old words with new meanings or new shades of meaning.”¹¹⁾

Ⅲ Australian English の一般的基本語彙及び頻出語

Ⅲ－１．第 1 章の中で言及した AusE の入門書（初心者向けで National Museum of Australia 発行のもの；2002）、*Aussie English for Beginners*. が採り上げている語彙を（和訳をつけて）以下に提示することにする。「既出」とあるのは本稿の中で既に取り扱っている語のことである。（‘Ab’=Aboriginal 由来の語）

- ①bilby ([Ab] ミミナガバンディクート；オーストラリア産の有袋類)
- ②bludger (‘prostitute’ のひも；居候；のらくら者)¹²⁾
- ③bonzer (既出)
- ④bullbar (既出)
- ⑤bung (既出)
- ⑥bunyip ([Ab] オーストラリア奥地の川・沼沢・袋水路に住むと言われる伝説上の怪物)
- ⑦the bush (既出)
- ⑧chook (British dialect に由来。にわとり、ひよこ；女)
- ⑨compo (worker’s compensation：((傷害・失業等の) 補償金)
- ⑩Croweaters (既出)
- ⑪dag (手入れのしてない、だらしが無い；時代遅れの；よごれた垂れ毛)
- ⑫dinkum (British dialect に由来。既出)
- ⑬donkey vote (ロバ投票：投票用紙に並んでいる候補者の順位通りに番号を記した票)
- ⑭Don’t come the raw prawn with me! (既出；(注) with の他に on, over を用いる)
- ⑮dreamtime (Aborigines の神話に関連した語で、祖先が天地を創造した時)

- ⑩drop bear (伝説上の動物。高さが1.5m位、koalaに外見が類似し、鋭い爪と歯を持ち、樹木の中にひそんで疑いを持たない人間、特に旅行者の上に落ちて来る)
- ⑪economic rationalism (経済的合理主義：私有化と規制を撤廃する方針を採り、公共支出を低くおさえる経済経営のアプローチ)
- ⑫fairy bread (三角形に切った白パンのスライス。バターを塗り、小さな色つき砂糖の玉を振りかける。子供のパーティーでよく出される)
- ⑬fossick (British dialectに由来。(「(金などを)掘る；探し出す」)
- ⑭Furphy (Queensland州でJoseph Furphyが弟と共同で経営していた会社が製造していた衛生車(給水車)を指し、第一次世界大戦中に使われていた‘Furphy carts’に由来。意味が転化し「でたらめなうわさ」を表すようになった)
- ⑮G'day (既出)
- ⑯jackaroo (1840年代には「未開拓地に住む白人」を意味していたが、1870年代頃には現在の意味、つまり「牧牛場・牧羊場の見習」を表すようになった；‘jackaroo’とも綴る)
- ⑰koori ([Ab] 既出)
- ⑱larrikin (British dialectに由来。ごろつき、無頼漢、暴漢、「不良少年」= ‘hooligan’)
- ⑲mate (既出)
- ⑳mozzie (=‘mosquito’：蚊)
- ㉑Noah (既出)
- ㉒Ocker (既出。意味は「典型的なオーストラリア気質の男」)
- ㉓plonk (ワイン、安酒)
- ㉔pobblebonk (‘banjo frog’とも言う。鳴き声がbanjoに似ているところから。蛙の鳴き声を示す擬声音に由来)
- ㉕Pom (又はPommy：「英国からの移住者」から「英国人」の意味に。
a Pommygrant>Pommy>pomへと短縮)

- ⑳ rort (詐欺、ペテン；ペテンにかける、煙にまく)
- ㉑ sheila (= 'a girl ; girlfriend ; woman')
- ㉒ She'll be right (既出)
- ㉓ snag (既出)
- ㉔ two-up (二人で行う賭博ゲーム；2枚の硬貨を投げて競う)
- ㉕ Waltzing Matilda (既出)
- ㉖ Woop Woop (「(架空の) 田舎町；奥地：'the Woop Woops'」)
- ㉗ wowser (British dialect に由来。「ひどく堅固しい人；極端な清教徒；絶対禁酒主義者；人の興をそぐ人」)

以上が基本的な一般語の一部である。

Ⅲ－2. 次に提示するのは、“Australian Words” というタイトルのついた AusE に属する一般的な、AusE 特有の語彙をリストアップした資料で、首都キャンベラにある Australian National University 内の AusE に関する語彙の収集・編纂を業務とする研究所 ANDC (Australian National Dictionary Centre) がまとめた最新のデータであり、非常に参考になる。¹⁰⁾ その中から必要と思われる語彙を、前述した語 (Ⅲ－1.) と重複するものを省いて以下に提示したいと思う (紙数の制約から和訳はつけていない)。

- | | | |
|---------------------|------------------------|-----------------|
| ①aerial ping pong | ⑱durry | ⑳public servant |
| ②Anzac | ⑲female factory | ㉑Queenslander |
| ③battler | ⑳galah | ㉒rogaining |
| ④bogan | ㉑galah session | ㉓rot |
| ⑤boomerang | ㉒geek | ㉔screamer |
| ⑥butcher | ㉓gilgai | ㉕skip |
| ⑦cobber | ㉔guernsey | ㉖sorry |
| ⑧cordie | ㉕happy little vegemite | ㉗spit the dummy |
| ⑨currency lad, lass | ㉖illywhacker | ㉘spunk |
| ⑩damper | ㉗kylie | ㉙tall poppy |
| ⑪didgeridoo | ㉘lairy | ㉚tart |
| ⑫digger | ㉙little Aussie battler | ㉛trackie daks |
| ⑬dob | ㉚magic puddidng | ㉜true blue |
| ⑭dog licence | ㉛moomba | ㉝widgie |
| ⑮drongo | ㉜geenish | ㉞wog |
| ⑯dunny | ㉝pav | |

手元にある資料には各語についての語義・由来・語法・初出年に関する記述が詳しくなされており、用例も記載されているので理解しやすい。

IV 重要項目別解説

IV-1. AusEのスペリング

綴り字 (spelling) と句読法 (punctuation) は AmE よりも BrE に一層近い。ただ、American spelling が全然使われていないわけではなく、結構広く使われているのが現状である。例えば ‘program’ という形は今ではごく一般であり、また ‘-or’ 形の語尾も ‘Australian Labor Party’ のように American style である。新聞の2/3は ‘color’ という綴り字を用いるが、残り ‘colour’ と綴り、ほとんどのオーストラリア人も同じである。¹⁴⁾

一方、‘-ise’ で終る動詞の語尾を見ると、オーストラリア人は *authorise*, *energise*, *idolise*, *organise*, *recognise*, *regularise* のようにいつも BrE 方式に従っている。

IV-2. 指小辞 (Diminutive) と短縮語 (Clipped-word)

AusE の一つの語彙面の特徴は、指小辞の多用である。接尾辞 *-o*, *-ie*, *-y*, *-ssie*, *-zzie* を単語の語尾に付けて親密さを表す。

(i)-*o* (注) <印は右側の語句からの変形を表す。

bottle-o (< a bottle collector : 空き瓶回収人)、*compo* (既出)、*confo* (< conference)、*info* (< information)、*milko* (< a milkman : 牛乳配達人)、*garbo* (< a garbage man)、*cobbo* (< a cobbler : 友、仲間)、*rabbo* (< a rabbit)、*preso* (< a president)、*smoko* (< a smoking-time : 休憩 ; 喫煙時間。smoke-ohとも言う)、*journ-o* (< a journalist)、*plonko* (< ‘plonk’ : 大酒飲み)、*goodo* (< good+*-o* ; good-*o*, good-*oh* の形もある。昔から使われていた語で、‘satisfactory ; all right’ の意味)、*whacko* (< whack+*o* : 「やった ; すごい」の意味)。

この他、地名についても *Kenso* (< Kensington)、*Paddo* (< Paddington)、*Darlo* (< Darlinghurst : Sydney 郊外の町) などの例がある。

その他、*muso* (< a musician)、*ambo* (< an ambulance man : 救急隊員)、*sicky* (病気欠勤 ; ずる休み) 等。

(ii)-*ie*

alkie (< an alcoholic)、*schoolie* (< a school teacher)、*trammie* (< a tramcar driver)、*coldie* (< a can or bottle of cold beer)、*truckie* (< a truck [lorry] driver)、*hottie* (< a hot-water bottle)、*pollie* (< a politician) 等。

(iii)-*y*

bandy (< a bandicoot)、*larrie* (< a larrikin)、*lavvy* (< a lovatory)、

cocky (< a cockatoo+y 小農夫)、octy (< an octopus) 等。

(iv)-ssie / -zzie

possie (< a position; place)、pressie 又は prezzie (< a present) など、数は限られている。

Chrissie prezzie (=‘Christmas present’) のような表現は一般的には ‘baby talk’ とか ‘woman’s talk’ と見做されることもあるが、AusE ではそのような印象は薄い。以下に、指小辞を用いた用例を参考のために挙げることにする。

(Ex. 46) Half past three. *Smoko*. We get thirty minutes. [(1947)
DAC]

(Ex. 47) ‘He was a *postie*. The kind that turns scraggy later...
always hurryin’ ter reach the next box. [(1970) DAC]

次に語句の短縮について。これは決して珍しいものではないが、AusE 独得の略し方があり、注目に値する。例えば、crocodile > ‘dile’, goanna > ‘go’ > hanna, cafeteria > ‘caf’, kangaroo > ‘roo’ (又は ‘roo’) 又は ‘kanga’, emu > ‘mu’, university > uni, Victoria > Vic といったように、かなり大胆と思われる省略をすることがある。

afternoon は ‘afto’ 又は ‘arvo’ となる。従って this afternoon は ‘sarvo’ と言う。更につけ加えると、kookaburra > ‘kooka’, kerosene > ‘kero’, representative > ‘rep’, portmanteau > ‘port’, delinquent > ‘delink’, dignity > ‘dig’, House of Representatives > ‘House of Reps’ 等の例を挙げる事が出来る。

IV-3. 古い俗語・方言に由来する語彙

18世紀に初期移住者たち (convict を含めて) が英国からもたらした語彙の中には、本国では一般化しなかった当時の俗語や方言が入っていて、

オーストラリアで広く使用され、中には本国に逆輸入されて一般化した語もある。元来、方言だったものが俗語に入り、AusEの一部になっている、いわば残存語に相当する語が少なからずある。

例えば日常生活の中で、‘plant’ という動詞を、クリスマスの贈物を子供に見つからない場所にかくしたりする時に、‘hide’ の意味で用いたり、また、経験の浅い未熟な人を ‘a new chum’ と表現したり、‘a two-up game’ を ‘school’ と呼んだりするのは、オーストラリアへ移送された初期の convict たちが用いていた criminal slang の名残である。

動詞 ‘plant’ は Shakespeare が *Twelfth Night* の中で (II.iii.173)、‘conceal’ の意味で用いている古い語である。また *Macbeth* の中で、主人公 Macbeth が二人の殺し屋に向かって ‘I will advise you where to *plant* yourselves’ (III.i.132) というセリフの中でも使っている。現代の用例を一つ示す。

(Ex. 47) I nicked around the house and *planted* myself behind the mile-high pile of fruit cases standing there. [(1983) DAC]

同様に、動詞 ‘shake’ (=‘steal’) や名詞 ‘lag’ (=‘convict’) も使われることがある。後者の ‘lag’ は convict の意味を持ち、‘old lag’ と言うと ‘an ex-convict’ (=‘a former prisoner’) を意味することになる。

(Ex. 48) Men ‘*shook*’ their neighbours’ calves and then diced with them. [(1950) AND ; *skook* (=‘stole’); diced : サイコロ賭博をした]

(Ex. 49) I didn’t come here to be insulted.... You’re the son of a *lag* yourself. [(1930) AND]

この他、‘trap’ は ‘a policeman’ を意味する語であるが、19世紀では「騎馬警官」を表していた。‘trap’ は動詞として ‘catch’ (offenders) を意

味する。

以上指摘した語は、起源的にはEnglish thieves' slangに属していた語が今日まで残存していたことの証左である。

(Ex. 50) They were sorry that Scanlon was dead and knew that he had been a good *trap*. [(1974) *DAC*]

その他、*swag* や *cove* (=‘fellow’)、*gammon* (=‘deceit ; nonsense ; deceive ; feign’ [*AND*]) も *cant* の残存語と見ることが出来る。どちらも意味が向上した結果、一般語に仲間入りした。

次に、古いBritish dialectsに由来する語が現在も用いられている例を示したいと思う。

例えば *ringer* (「最も腕のいい羊毛刈り職人」；元は「最上、極上のもの」の意)、*knockabout* (「農場・牧場の臨時雇人」；元は「放浪者」)(以上2語はYorkshire方言から) / *buster* (「墜落；強烈で冷たい南風」)、*skillion* (「毛刈りの順番を待つ羊の小屋」)、*rouseabout* (「牧羊場の雑役夫」；元は「流浪人」)(以上3語はイングランド南部方言) / *stonker* (「挫く」；*stonkered* 「へとへとになって；打ちのめされて」)(Scottish) / *barrack* (「声援する；非難する；からかう」)(Irish) / *boomer* (「特大のもの」；元は「雄の大型カンガルー」)(Warwickshire) / *sheila* (「若い女性」)(Irish?) / *fossick* (「捜し出す」)(Cornish) / *cobber* (「仲間、友だち」)(Yiddish 又は Suffolk 方言) / その他、*dinkum* (既出)、*chook* (既出)、*snag* (既出)、*larrikin* (既出) なども方言から入った語彙である。*billy*、*tucker*、*damper* など奥地生活にゆかりのある語も方言に由来している。

このような方言由来の語のうち、*larrikin*、*skerrick* (「少量、小片」)、*chiack* (「からかう、馬鹿にする」)、*fossick*、*barrack*、*cobber*、*dinkum*、*wouser* などの語は、英本国に逆輸入されて一般に使用されるようになった。

IV - 4. Bush Idiom¹⁵⁾

奥地で生まれたオーストラリア独得の慣用表現として ‘bush idiom’ がある。自然の風物や動植物を用いて比喩的に表現した句で、都会にまで普及した庶民のことばである。

19世紀の後半から20世紀の初頭にかけて、*Bulletin* 誌は都会の読者に数多くの物語や記事を通して ‘bush’ で使われるユニークな言葉を無数に提供した。‘bush’ に関連した表現を広く読者に知らしめ、普及させる上で *Bulletin* 誌の果たした役割は大きい。

また Henry Lawson, Banjo Paterson, Rolf Boldrewood, Tom Collins, Marcus Clarke, C J Dennis といった小説家や詩人たちも、slangy な *bush* の表現を作品の中で用い、その結果、19世紀における AusE の口語体になからぬ影響を及ぼしたと言える。

驚き・不信・嫌悪感を独得の言い回し（感嘆詞）を用いて表現する時に、*bush* に生息する動物・鳥類を借りてきて、例えば ‘Stone the crows!’, ‘Starve the lizards!’, ‘Stiffen the snakes!’ などと言った。生き生きとした感じを与える点で効果的な表現になり、更に simile（直喩）を用いて ‘as bald as a bandicoot’（頭がつるつるにはげ上がって）、‘as mad as a goanna’（‘goanna’ は大とかげ）、‘as mad as a gumtree full of galahs’（‘galah’ はオーストラリア産おうむ）などと表現することにより、一層効果的な形容となる。以下、代表的な simile を示す。

まず ‘bandicoot’ を用いたもの：

balmy（又は barmy）as a bandicoot / lousy as a bandicoot / miserable as a bandicoot / poor as a bandicoot / bandy as a bandicoot / flee like bandicoots before a bushfire 等。

次は ‘gumtree’ を用いたもの：

up a gumtree（up a wattle の変形；「困惑して、途方に暮れて」） / to have seen one’s last gumtree（= ‘to be on the verge of death’）

その他の直喩を用いた句：

sick as a blackfellow's dog (= 'extremely sick') / thin as a swaggie's dog / fat as a larrikin's dog / leap like a lizard (= 'to dart forward') / climb like a possum (= 'to climb rapidly') / happy as a possum up a gumtree (= 'extremely happy') / mad as a cut snake / mad as a frilled lizard / game as a pissant (= 'extremely courageous') / drunk as a pissant (= 'extremely drunk') / silly as a curlew (= 'extremely silly') / tough as a fencing wire (= 'long-lasting ; durable') / sit up like Jackey (= 'to sit up straight')

これらとは別に、all behind like Barney's bull (= 'exhausted') / a bit of a lyrebird (= 'a minor lie') / have a crow's eye (= 'to be cunning') / a thousand miles the other side of sundown (ゴールに至るまでの果てしない距離を表す) / as hot as the blanky hobs of hell (the hottest dayを表す)

など、数多くの多彩な表現が生み出されている。雨乞いの表現として 'Send her down, Hughie!' があるが、この慣用句はつとに有名であり、20世紀の始めからは 'Send it down, David (又は Davy)!' という句が英国軍隊を中心に使われるようになった。¹⁶⁾

また、'Starve the lizards!' の変形として lizards の代わりに wombats, bardsies, rats, ninnies, sparrows, mopokes が使われることがある。

以上見てきた通り、*bush* で生まれたこれらの idioms は *bush* で暮らした人たちが率直に、直截的に、飾り気や気どりなしでストレートに表現したものであり、*bush* の生活や有様が生き生きと伝わって来る効果を一層強める働きをしている庶民のことばなのである。

IV-5. 重要項目として解説するつもりであった他の事項については、紙巾の制約もあって割愛せざるを得なくなってしまった。機会を改めて記述を続け、意の満たない点を補充したいと思う。最後に、気取らず、飾り気の少ない庶民の egalitarianism に基づくいわば '普段着' の AusE speech に

ついでに示唆に富む指摘を以下に引用することにする。

Although Australians haven't succeeded in creating the true classless society, they have gone such a long way along the road that it is not always possible to determine a man's class (or status) by his speech. Whether this is due to the egalitarian nature of the society, or of a desire by the educated classes to avoid criticism, is not clear, but the fact remains that Australia is one of the few countries in the world where there are remarkably few differences between the speech of a labourer and the self-made millionaire. . . . But in Australia, this pronunciation (i.e. Australian English pronunciation) pervades the entire continent. The native of Perth and the native of Townsville use precisely the same phrases pronounced precisely the same way, gentleman and labourer alike.¹⁷⁾

V 結び

Australian English に対して関心を持ち、初めてその言語的側面の一つについての論文を書いたから、いつの間にか30年ほどになる。Australian English との付き合いはかなり長いと言える。

World Englishes の一つ、英語の一変種としての AusE が持つ多様な特徴は、研究の対象として私の興味をそそり、その発音と語彙、とりわけ、口語・俗語で用いられる語彙と慣用的表現 (colloquialisms) には、AmE にも BrE にも見られないユニークな特徴がある。

今回、これまでの論文では余り言及しなかった AusE の一般的基本語彙と口語表現、俗語を含む慣用句に重点を置き、特徴を指摘しながら記述したが、これまでに発表した 'lexicon' 中心の論文との重複を出来るだけ避けるように配慮した。特にユニークな 'Aussie English slang' にはかなりスペースを費やす結果となった。従って、オーストラリアにおける初期植民地時代の古い語彙、廃れつつある語句、19世紀中葉のゴールドラッシュ

時代における金鉱・採掘関連用語 (gold-mining terms)、第1次、第2次大戦中の軍隊用語 (digger dialects) などについては、紙数と時間の制約もあり、敢えて記述を控えた。

また、AmEや他の言語がAusEに及ぼしている影響とか、最近、自国のAusEの研究者たちによって研究が進められている地域差によって生ずる語彙の違い、特定地域特有の語彙についても詳述するスペースがなかった。

一昨年と昨年、幸運にも数ヶ月にわたるSabbatical leaveを大学より特別に認めて戴き、Australiaでの3大学、New Zealandにおける1大学、そしてAusEのルーツを探る目的を持ったEnglandにおける1大学のそれぞれにおいて、十分満足のゆく実り多い研究生生活を送ることが出来たことに対して、心から感謝の言葉を申し上げたいと思う。また不在中、種々の面でご協力いただいた英語担当スタッフの方々にも謝意を表したい。

現地の各大学で得た知見、情報、収集した多くの貴重な資料は、今後の研究に生かしていきたいと願っている。

Notes

- 1) いわゆる 'Global English', 'New Englishes' については、次の書物が詳しく解説をしている。

Crystal, David. *English as a Global Language*. (1998). Cambridge: Cambridge University Press. pp113-140.

また 'World Englishes' については、次の書物が記述している。

Moore, Bruce. (ed.) *Who's Centric Now?: The Present State of Post-Colonial Englishes*. (2001). South Melbourne, Victoria: Oxford University Press.

'World Englishes' という用語はBraj Kachruと他の人たちによって命名され、1970年代以降使用されている。

- 2) 1819年にNew South Wales (現在のQueenslandも含まれていた) の人口の3/4をconvictとその家族たちが占めていた。その後一般移住者 (free settlers) も渡豪するようになる。独立植民地のうち、現在のVictoria, South Australia, Western Australianの3州は、囚人の移送地にはならなかった。流刑制度が1851年に廃止されるまでに、160,000人が移送された。New South WalesとVan Diemen's Land (今のTasmania; 1803年に設立) に送られた流刑囚たちは、主としてLondon, Lancashire, Dublin, Yorkshire, Warwickshire, Surreyなどの地域の出身者たちだった [Ramson (1966), p.53]。

- 3) 1791年に主としてカトリック系のアイルランド人の政治犯が、また1793~1802年の期間にはアイルランド系の流刑囚が送られた。1851年までには流刑囚全体の約30%を占めるほど多かった。しかし、それ以降は減少している。スコットランド系の移住者が占める比率は小さかった [Ramson (1966), p.50; Ramson (1970), p.36]。
- 4) 都市居住者が多かったために、田園や地方の地形・風土に密着した語彙を欠いていたため、古来から使われてきた brook, glade, glen, dale のような美しい響きの語はなじみがないために使われることはほとんどなく、次第に消え失せ、それらに代わる語として例えば、forest→'bush' /brook→'creek' /dam→'tank' /pond→'lagoon' /field→'paddock' などの語が登場し、また牧畜業に関連する語彙についても flock (herd)→'mob' /sheep walk→'run'; 'station' /cottage→'hut' のように入れ替った。南半球に位置する関係から、オーストラリアでは Christmas は真夏、12月は夏の月、7月は冬の月を意味する。
- 5) AusE の語彙には同義語が豊富にあり、ニュアンスの違いはあっても表現に変化を与えている。例えば a girl (又は woman) の同義語として *bart, cliner, donah, sheila* を始め、*bag, crow, bird, sort, titter, tabby*, などがあり、a fool の代りに *dill, dope, drongo, dud, droob, wet, galah, nit, nong, twerp, twit, peanut, dingaling* など。また a policeman の同義語には *Charley, crusher, trap, walloper, snaffle, man, John, cop, dee, demon, flat* など数多くある。drunk の同義語は *tight, inked, pissed, shickered, slewed, squiffy, stung, spliced, molo, tanked, stonkered, rotten* など、バラエティに富んでおり、gaol の同義語は非常に多い。
- 6) 「都会から離れた奥地」を意味する語句として、outback, back country, black stump (遠い未開の地方), never-never (land) (遠い人の住まない不毛の地), back of (又は'o) Bourke などの語句があるが、イディオムに 'beyond the black stump' (= 'in the remote outback') というのがある。
- 7) 'bush idioms' については Baker (1966, 2nd Edition) が詳細に記述している (pp.86-95)。
- 8) Hornadge, Bill. *Australian Slangue*. (1998). Cambridge: Cambridge University Press. Reprinted. pp.71-72.
- 9) Baker (1966), p.359.
- 10) Ramson (1970), p.50.
- 11) Baker, op. cit. p.9.
- 12) 'bludger' は本来 'pimp' を意味していたため、その使用には注意が必要だった。1980年代頃までは「仕事や手伝うのをさぼる人」のことを指す意味で用いられ、1980年代はもっぱら「無職ののらくら者」を指す軽蔑語として 'dole bludgers' などの句で表現されるようになった [MAU, p.56]。
- 13) Sabbatical 休暇中、当研究所 (ANDC) において在外研究をしていた折、研究所長の Dr. Moore から戴いた貴重な資料の一つがこれである。
- 14) Blair, David & Peter Collins, et al. (2001). *English in Australia*. Amsterdam: John Benjamin Publishing Co. p.160.
- 15) Baker, op. cit. pp.86-95 に詳しい記述がある。
- 16) 固有名詞を用いた慣用句はかなり多い。その中でも、*Up there, Cazaly!* (激励ま

たはお祝いの叫び声。有名なフットボーラーの名前に由来)/ *Drongo Handicap* ((競馬) 障害物レース。1925年に引退した一度も優勝しなかった競走馬の名前から)/ *Jimmy Wood* (又は*Jimmy Woodser*; 「一人酒 (を飲む人)」)/ *Buckley's chance* (「絶望、ほとんど望みがないこと」; 脱獄後32年間原住民の間で生活し、1856年に刑務所で死亡した男 William Buckley にちなむ句)/ *Blind Freddie* (「この上なく低能な人」; 'Blind Freddie could see that.' という表現の中で使われる)/ *Australian as a meat pie* (紛れもなくオーストラリア的な)/ *Hay and Hell and Booligal* (想像を絶するほどひどく不快な、苛酷な場所; 'Hull, Hell and Halifax' という古い句をもじったもの)/ *as drunk as Chloe* (= 'very drunk'; 語源は不明)/ *the Old Dart* (= 'England')/ *shoot through like a Bondi tram* (= 'to escape, disappear, or, leave very swiftly')/ その他 *Murphy's Law*; *Melba toast*; *a Jacky Howe*; *banksia* (<Sir Joseph Banks (1743-1820); 植物学者名に由来) などがよく知られている [Wilkes (1993), pp.62-71]。

17) Hornadge, op. cit. p.95.

References

- Arthur, J.M. & W.S. Ramson. (ed.) (1990). *W.H. Downing's Digger Dialects. A Collection of Slang Phrases Used by the Australian Soldiers on Active Service*. Oxford: Oxford University Press.
- The Australian Concise Oxford Dictionary of Current English*. (1987). Melbourne: Oxford University Press. [ACOD]
- The Australian National Dictionary: A Dictionary of Australianisms on Historical Principles*. (1988). Melbourne: Oxford University Press. [AND]
- The Australian Pocket Oxford Dictionary*. (1976). Melbourne: Oxford University Press.
- Bailey, R.W. & Manfred Görlach. (ed). (1982). *English as a World Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Baker, S.J. (1943). 'The Influence of American Slang on Australia,' *American Speech*, Vol.18, No.4, pp.253-6.
- _____, (1966). *The Australian Language*. Sydney: Currawong Publishing Co. 2nd ed.
- Bell, Philip & Roger Bell (ed). (1998). *Americanization and Australia*. Sydney: University of New South Wales Press Ltd.
- Blair, David & Peter Collins (ed.). (2001). *English in Australia*. Amsterdam: John Benjamin Publishing Co.
- Brook, G.L. (1972). *English Dialects*. London: Andre Deutsch.
- Brooks, M. & Joan Ritchie (ed). (1994) *Words from the West: A Glossary of Western Australian Terms*. Melbourne: Oxford University Press.
- _____, (1995). *Tassie Terms: A Glossary of Tasmanian Words*. Melbourne: Oxford University Press.
- Burchfield, R. (ed). (1994). *The Cambridge History of the English Language*. Vol. 5. Cambridge: Cambridge University Press. [CHE]
- Collins, P. & David Blair (ed). (1989). *Australian English: the Language of a New*

- Society*. St Lucia : University of Queensland Press.
- Crystal, David. (ed). (1997). *English as a Global Language*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Franklyn, J. (1953) *The Cockney : A Survey of London Life and Language*. London : Andre Deutsch.
- _____, (1975). *A Dictionary of Rhyming Slang*. London : Routledge & Kegan Paul.
- Hornadge, Bill (1980). *The Australian Slangage*. Cassell Australia : North Melbourne, Victoria.
- Horvath, B. M.(1985). *Variation in Australian English : the Sociolects of Sydney*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Hudson, Nicholas. (1993). *Modern Australian Usage*. Melbourne : Oxford University Press. [MAU]
- Hughes, T. (ed). (1989). *Australian Words and Their Origins*. Melbourne : Oxford University Press. [AWO]
- Macquarie Dictionary*. (1992). Edited by Delridge, A. et al. 2nd ed. Reprinted. Macquarie University : The Macquarie Library Pty Ltd. [MD]
- Matthews, W. (1970). *Cockney Past and Present : A Short History of the Dialect of London*. Detroit : Gale Research Co.
- Maurer, D.W. (1944). “Australian” Rhyming Argot in the American Underworld’, *American Speech*. Vol.19, No.3, pp.183-95.
- Mitchell, A.G. & A. Delbridge (1971). *The Pronunciation of English in Australia*. Sydney : Angus & Robertson.
- Moore, Bruce. (ed). *Who’s Centric Now? : the Present State of Post-Colonial Englishes*. (2001). South Melbourne : Oxford University Press.
- _____, (1993). *A Lexicon of Cadet Language : Royal Military College, Duntroon. In the Period 1983 to 1985*. Canberra : ANDC, Australian National University.
- _____, (2000). *Gold! Gold! Gold! : A Dictionary of the Nineteenth-century Australian Gold Rushes*. Oxford : ANDC, Australian National University.
- Morris, E.E. (1898). *Austral English : A Dictionary of Australasian Words, Phrases and Usages*. London : Macmillan.
- The New Oxford Dictionary of English*. (1998). Edited by Judy Pearsall et al. Oxford : Oxford University Press. [NODE]
- The Oxford English Dictionary*. (1970). 13 vols. Oxford : Oxford University Press. (Reprinted). [OED]
- A Supplement to OED*. (1972-86). Edited by Burchfield, R.W. 4 vols. Oxford : Oxford University Press. [OEDS]
- Partridge, E. (1970). *Slang Today and Yesterday*. London : Routledge & Kegan Paul. 4th rev. ed.
- _____, & J.W. Clark (1968). *British and American English Since 1900*. New York : Greenwood Press.
- Peters, P.H. (ed). (1995). *Australian English in a Pluralist Australia*. The Dictionary Research Centre, Macquarie University.

- _____, (1995). *Cambridge Australian English Style Guide*. The Dictionary Research Centre, Macquarie University.
- Robinson, Julia. (ed). (2001). *Voices of Queensland: Words from the Sunshine State*. ANDC, Canberra: Oxford University Press.
- Ramson, W.S. (1966). *Australian English: An Historical Study of the Vocabulary, 1788-1898*. Canberra: Australian National University Press.
- _____, (ed). (1970). *English Transported: Essays on Australian English*. Canberra: Australian National University Press.
- Troubridge, V. (1946). 'Some Notes on Rhyming Argot', *American Speech*, Vol.21, No.1, pp.45-7.
- Trudgill, Peter. (1986). *Dialects in Contact*. Oxford: Basil Blackwell Ltd.
- Turner, G.W. (1972). *The English Language in Australia and New Zealand*. London: Longman. 2nd ed.
- Wilkes, G.A. (1978). *A Dictionary of Australian Colloquialisms*. London: Routledge and Kegan Paul. [DAC]
- _____, *Exploring Australian English*. (1993). Sydney: ABC Books for the Australian Broadcasting Corporation.
- Occasional Papers*. Australian Language Research Centre (Sydney University). No.1 (1964)~No.14 (1969)
- OZWORDS: A Newsletter from the Australian National Dictionary Centre*. 1994-2001.

(本学経営学部教授)